

校長室だより (No.6)

令和 5 年 6 月 21 日
丹波市立黒井小学校長
谷口 千尋

紫陽花の季節

ドイツ生まれの医師であり博物学者のシーボルトは、江戸時代に長崎の出島のオランダ商館の医師として日本に来ました。西洋医学を日本に広め日本人の医者を育成しました。また、日本の動植物などを西洋に広く広めたことでも知られています。



シーボルトはいろいろな植物の中でもアジサイが好きだったようです。彼の著書である「日本植物誌」には、紫陽花のことを「オタクサ」としてしています。正式には、「Hydrangea otaksa」として紹介しています。日本で知り合った「オタキさん」という女性の名前からこの名前をつけました。ハイドランジアは、ギリシャ語で「水の器」という意味があります。雨の季節の花によく合う名前だと思います。

シーボルトは、日本に 1828 年まで通算 6 年間滞在しました。その間、江戸への参府に同行したり、長崎の鳴滝に学塾を設けたりして、多くの日本人に西洋の医学や自然科学を教えました。帰国する時に、日本の地図を持ち出そうとして再入国禁止となったことは有名です。帰国後は「日本」を編纂しました。シーボルトが持ち帰った日本の動植物の標本がもととなり「日本動物誌」や「日本植物誌」が編纂されました。

動物（魚類）では、「日本動物誌」に「Leuciscus Temminckii」と「Leiciscus Sieboldii」という 2 種類の「カワムツ」が掲載されています。「Leiciscus Sieboldii」にはシーボルトの名がつけられた「カワムツ」であることが分かります。日本ではカワムツの学名として「Zacco temminckii」が使われてきましたが、「Zacco sieboldii」という学名は、和名の「ヌマムツ」につけられました。この Zacco は、オイカワ属の学名であり、シーボルトが日本の「雑魚（ざこ）」からとったと言われています。

ずっと昔に、日本人の名がついた植物（紫陽花）がヨーロッパで紹介されたり、日本に滞在したシーボルトの名が学名になったり、「雑魚（ざこ）」という言葉が現在でも学名で残っていたりしています。「学名」の背景にあるものの深さにいろいろなことを学びました。